

ろくべん館だより

『入谷康一さんのこと』

昨年十月に『信州伊那谷 大鹿歌舞伎』という写真集が出版された。撮影したのは神戸在住の写真家、入谷康一(いりたにこういち)さんだ。

この写真集は大鹿歌舞伎を中心に、村の人々や風景が集められているのだが、春景色を見ればその風の匂いまで嗅げそうな、談笑する人々を見ればその会話まで聞こえてきそうな、実に生き生きとした写真に溢れている。歌舞伎の写真は、村内のおなじみの顔がたくさん並んでいる。役者の表情も様々で、出番待ちの緊張感や、化粧に集中する真剣な顔もあれば、誰かの冗談に和気藹々の楽屋もあり、大鹿歌舞伎には欠かせないユーモラスな空気もたっぷりと写り込んでいる。ともかく、歌舞伎の写真も一枚一枚が味わい深く、つい見入ってしまう。中でも御柱(おんばしら)の奉納歌舞伎の写真は、現在の春秋の定期公演とはまた違った趣を持っている。観客はムシロやゴザの上に座り、お重を広げて酒盛りしながらの観劇をする。おそらく昔の「舞台も客席も村人」だった時代は、こんな雰囲気だったのだろうと想像されるような貴重な写真である。

入谷さんの写真は、芸術家の目でも、言ってしまうえば写真家の目でもなく、生活者の目に近い視点で撮られていると感じられる、素朴で正直な写真なのだ。

この写真集の前に、入谷さんはもう一冊『信州伊那谷—神棲む里の四季』という写真集を出版している。この写真集を見ると、ああ、この人は伊那谷の風景も祭りも人も大好きなのだ、というのが伝わってくる。伊那谷の何が、こんなにこの人を惹きつけているのだろう。

平成三年のこと、雑誌に載っていた一枚の写真が、入谷さんを伊那谷へと導いた。写真を見た二日後には、上村下栗の地に立っていたのだという。

——崖といったほうが適切なくらいの傾斜地に、丹精した畑があり、石置屋根の民家が点在していました。そこで見たものは、都会に住むものが失くしてしまった、日本人のところが生きていたことでした。

その「日本人のころ」を求めて、以後頻繁に入谷さんは伊那谷へと足を運ぶことになった。下栗を訪ねた翌年、地蔵峠を越えて初めて大鹿に入ってからというもの、大鹿歌舞伎も入谷さんを惹きつけるものの一つに加えられた。

入谷さんの本業は写真家ではなく、会社員である。忙しい本業の合間に伊那谷に飛んで来る。平成七年の一月も「新野の雪まつり」「早稲田の神送り」を訪ねて、神戸に帰った。そしてその翌朝に起こったのが阪神淡路大震災だった。

——まさに悪夢のような一日。九死に一生を得、近隣の人々を助けているうちに、我が家は全焼しました。逃げ廻った二日後、焼け跡から黒い塊のフィルムケース二箱を見つけました。それまでの撮影フィルム約二千本がすべて焼失し、跡形もなくなった中で、一部損傷したとはいえ、伊那谷のフィルムのみが焼け残ったことは、まさしく、伊那谷に住む山の神々のご霊験によるものと、思えてなりません。

残ったフィルムのおかげで、震災の起こる以前に決まっていた一ヶ月後の個展を、予定通り「日本の原風景 信州伊那谷発」と題して大阪で開くことができた。家財一切を失くした中で、嘆くことをせず、残されたものを神様の加護と信じ、生きる力にした入谷さんは立派だ。入谷さんにこの時の話を聞くと、胸打たれずにはられない。

震災後に奇跡的に残った写真が、『信州伊那谷—神棲む里の四季』として出版されたもので

ある。この写真集の中には、写真の縁が変色したり、変形している写真が含まれている。よく見るとそれとわかるのだが、それよりも写真自体が目を引きつけるので、後から被災フィルムという説明を見てはっと気づくことが多い。伊那谷の神様が救い出した写真が、そこに並んでいた。

入谷さんは伊那谷の神様に足を向けて寝られないと言うのだが、こんなに真摯に伊那谷の心を伝えようとする入谷さんに、私は足を向けて寝られないように感じている。この谷の美しさは、ここに暮らす人々が、どうやって生きてきたかに由来していることを、入谷さんは一目で見抜く目を持っていた。そんな入谷さんの写真集を「伊那谷へのラブコール」と称する人がいたが、伊那谷の神様だって、きっと入谷さんを気に入っているに違いないと思うのだ。

写真集『信州伊那谷 大鹿歌舞伎』は、公民館の貸し出し図書にも入っている。ろくべん館にも置いてあるので、御覧になりたい方は、ぜひ御立寄りを。